時の動き

朝鮮学校差別に抗う

「無償化」排除に反対する連絡会　森本　孝子

朝鮮学校の設立と弾圧

２０２５年は日本の敗戦80年、それは植民地支配されていた朝鮮にとっては解放80年、さらに朝鮮学校の多くが80周年を迎えた年だった。

植民地化によって奪われていた言葉や文化を取り戻し、朝鮮人としてのアイデンティティーを育てるために、小さな部屋で始まった国語教習所が朝鮮学校の始まりだった。やがて学校としての体裁を整え、朝鮮学校となり、全国に５００余りの朝鮮学校が誕生した。

しかし、朝鮮半島に２つの国が誕生することで、大きな試練が訪れた。北の朝鮮民主主義人民共和国（共和国）と南の大韓民国（韓国）は、それぞれ政治体制の異なる国となった。韓国ではアメリカに亡命していたイ・スンマンが初代大統領になり、日本に残った朝鮮人同胞については日本政府に任せるとして棄民した。共和国は、キム・イルソン主席が日本に残った同胞に対して手厚い支援を贈り、朝鮮学校を支援した。やがて社会主義国の力が強まることを恐れたＧＨＱとその支配下にあった日本政府は、朝鮮学校への圧力を強めていく。

１９４５年には阪神教育闘争と言われる弾圧への闘いが行われた。朝鮮学校には閉鎖令が出され、抗議する人たちに放水での弾圧や、拳銃を持った日本の警官が当時16歳（数え年齢）の少年を撃ち殺したのだ。全国で展開された朝鮮学校を守る闘いは、日本人の支援者も含め多数の検挙者を出し、懲役刑含めた刑が課された。この時に逮捕され拷問を受けた後釈放された当時の朝鮮人連盟（朝連、後に朝鮮総連になる）の地区委員長だった人も亡くなり、この二人は、やがて東京にある青山墓地の「無名戦士の墓」に祀られ、その場で偲ぶ会が毎年行われるようになっている。今年は、４月24日午前10時から墓地前で集会を行うので、関心ある方はご参加ください。

無償化からの排除とこれから

さて、朝鮮学校は、２０１０年発足の高校無償化制度から排除され続けている。民主党政権の目玉政策であったこの制度は外国人学校にも無償化制度の適用をするという画期的なものだったが、朝鮮学校は核や拉致問題を理由に、特別審査を受けることになった。当時文科省の高官であった前川さんはこの審査会では合格させる方向で考えていたというが、政権交代が起きて安倍政権になり、まず行われたのが、朝鮮学校を永遠に排除するための政策だった。朝鮮学校にも無償化を適用するようにと、市民団体が立ち上がり、後の高校生などが原告となる国賠訴訟の支援を全力で行った。

しかし、司法はまるで打ち合わせたような判決で、全国5ヵ所で最高裁まで合計15判決のうち、わずかに大阪地裁がまともな判決を出したという以外、1勝14敗だった。

その後支援団体は、各地域の朝鮮学校に支援団体を作ろうという方針を出し、東京に9校ある中学校までの朝鮮学校のうち、２０２５年までに8校に支援団体ができた。最後に残ったのは、東京で1番大きな朝鮮第一初中級学校だった。私はこの学校がある荒川区在住で、いろいろな学校行事に参加してきたが、学校規模が大きいため、夜会などの行事には日本人は招待されなかった。

しかし、ここ10年くらいの間に生徒数は半減するなど厳しい状況が作られてきた。やっと支援のための準備会を作り、様々な活動を経て、今年3月7日「第一ハンマウムの会」の結成集会を行うに至った。「日本人ファースト」などという言葉がはびこり、「スパイ防止法」が制定されるという中で、朝鮮学校への風当たりは強くなるだろう。朝鮮学校を守る活動は日本人の責任だろうと思う。

詳しいことを知りたい人は、私たちが発行した『朝鮮学校物語2』をご覧ください。

（もりもと　たかこ）